



数日前の寒気で、例年になくきれいに紅葉していた木々はすっかり葉が落ちて冬景色になり、クリスマスツリーの飾りを街角で見かけるようになった。2年前から年末にイタリア・ドイツを廻る旅に参加しているが、12月初旬に主催する研究会が終わったら、イタリア語CDでの会話の特訓が待っている。このツアーではドイツの病院、介護施設や緩和病棟の見学があり、医師やスタッフから現状を聞く時間もある。日本のような厳密な栄養管理や患者サービスのシステム、制服や接客などの対策マニュアルはないものの、根底に人間の尊厳を重視した理念が感じられた。

## クリスマスの旅と終末期医療

情報広報部副部長 藤井 美穂

高齢者の終末期医療について」の内容が強く心に残っている。胃瘻の適応についての話だった。胃瘻はSydney Jonesが全身麻酔下で開腹による造設に成功した1875年以降、胃内視鏡下に胃瘻造設するいわゆるPEGが広がったが、最初の成功症例は1979年小児科医Gauderer、外科医Ponskyによる生後4カ月半の乳児だった。当初は神経疾患や嚥下障害の小児が対象だったが、しだいに脳血管障害の機能障害患者に拡大した歴史をもつ。日本では2008年度のPEG新規造設件数は20万件ともいわれ、ますます増加傾向にあるようだ。

2012年1月28日、日本老年医学会は「高齢者の終末期の医療およびケアに関する立場表明2012」を

発表し「胃瘻造設を含む経管栄養や、気管切開、人工呼吸器装着などの適応は、慎重に検討されるべきである。すなわち、何らかの治療が、患者本人の尊厳を損なったり苦痛を増大させたりする可能性があるときには、治療の差し控えや治療からの撤退も選択肢として考慮する必要がある」と述べた。経口摂取への移行に時間がかかるためPEGにして在院日数の短縮を図ったり、介護施設では食事介助の手が足りなくPEGがないと入所を断る施設も多く、患者不在の医療・介護経営の側面が問題視され、メディアでも取り扱うことが多くなった。

昨年は大晦日に帰国したが、売店には中央公論1月号が並んでおり、特集は「宗教が「死」を見つめ直す」だった。今年の文藝春秋12月号には五木寛之・選の読者投稿「うらやましい死に方」が見出しになっており、バックナンバーでも「各界著名人58人が望む理想の死に方」「見事な死 阿久悠から黒澤明まで 著名人52人の最期」などが見出しにあり、人生最期いかに迎えるかが超高齢社会の日本では大きなテーマになっていることを実感する。

2012年11月開催の性差医療情報ネットワーク研究会・教育講演として、東京大学加齢医学講座教授の大内尉義先生が話した「高

齢者の終末期医療について」の内容が強く心に残っている。胃瘻の適応についての話だった。胃瘻はSydney Jonesが全身麻酔下で開腹による造設に成功した1875年以降、胃内視鏡下に胃瘻造設するいわゆるPEGが広がったが、最初の成功症例は1979年小児科医Gauderer、外科医Ponskyによる生後4カ月半の乳児だった。当初は神経疾患や嚥下障害の小児が対象だったが、しだいに脳血管障害の機能障害患者に拡大した歴史をもつ。日本では2008年度のPEG新規造設件数は20万件ともいわれ、ますます増加傾向にあるようだ。

認知症患者へのPEGの適応が除外されている。アメリカ老年医学会（AGS）は、人工的な栄養投与はほとんどの症例において患者のためにならないとし、米国アルツハイマー協会は、アルツハイマー末期で嚥下困難になった患者に対する最も適切なアプローチは、死へのプロセスを苦痛のないものにするこじ、ANH(artificial nutrition and hydration)を行うとしても、やがてその中止を決断しなければならぬ時がくると助言している。ヨーロッパではESPENガイドラインの中で、末期の認知症患者では経管栄養は推奨されず、嚥下障害のある患者において経管栄養が誤嚥性肺炎の予防に貢献することは証明されていないとして、患者のQOLを改善する医学的根拠のないPEGを実施する場合は、批判的かつ制限的なアプローチが必要であるとの助言・勧告がされている。

私が医師5年目に、愛する祖母が甲状腺がんで亡くなった。死の2週間前に窒息死を避けるために気管切開したが、ホワイトボードに書いた祖母の震えた文字が今でも目に焼き付いている。「ことばをしやべれないなんて、人間として生きていた、生きていたのがくるしい」。一方、昨日わが家のヘルパーさんが「寝たきりの認知症の母が誤嚥性肺炎をくりかえすのでPEGにしてみました」と晴れ晴れとして私に同意を求めるように話した。

終末期の認知症の方などへの胃瘻造設は倫理的問題を含み、国民的議論が必要であると医学論文やメディアは結ぶが、やがてくる家族の最期をどう迎えるか年末の旅で考えてきたい。

PEG全盛期を超え、欧米諸国ではすでに